『第29回 高校生学園祭ポスターコンテスト講評』

受賞された各校の皆さま、おめでとうございます。

今年も送られたデータを PC 上で拝見して各賞を決定する方式になりました。77点を拝見して、それぞれ学園祭をどう表現しようかという個人またはチームの創意工夫を感じました。

全体的なエネルギーは昨年より控えめかなというのが感想です。まとまった画面のポスターは多いのですが、見たこともない世界を提示してくれた作品は少なかったという気がしました。
もちろん各々のポスターは真剣に練られ、描かれていることは承知しています。申し訳ないことに選考会は他校および過去作との比較になってしまうために、どうしても点が辛くなってしまいます。

このコンクールが最初から入賞目的のものであったら「傾向と対策」。つまり過去の入賞作を研究して表現が被らないように、より斬新な表現をという対策も施せるでしょう。
しかし、皆さん別に当コンクール入賞を目標にしてポスターを創っているわけではないでしょうから、これからもご自由に自分たち独自の視点と価値観でポスターを創っていっていただければと思います。

審査会の審査基準のひとつとして「学園祭らしさ」があります。人を呼び込むのが第一の目的である学園祭ポスターですから、できるだけポジティブに陽気に街ゆく人々に楽しさを訴えられていれば素敵なことです。

重力を無視した空中浮遊作品、逆さまになって空を飛翔する構図は昨年 0、今年は 7 点と顕著な差が出ました
この面白い傾向は考察してみたいものです。
より素敵なポスターを目指して来年の制作とご応募も期待しています。

講評：デザイナー 辻野淳晴

［講　評］デザイナー：辻野淳晴

■最優秀賞　叡明高等学校（以下学校名敬称略）

さまざまなモチーフが見事に配置され、学園祭らしい要素を洗練された美しさで満たしています。

寒色系でまとめた神秘的な雰囲気は、通行する人々の足を一瞬止めさせることでしょう。

細部に行き届く繊細な筆致と緻密な構図や、透明なトビウオという斬新なモチーフが作者の感性を全面に押し出しています。学園祭ポスターの枠を超え、長く鑑賞したくなる魅力的な一品です。

叡明祭は昨年も「開催日程」などの記述がないという点が不思議なのですが、ポスターの要件を満たす要素としてどこかに配置された作品も見たいと思いました。

■優秀賞　埼玉県立伊奈学園総合高等学校

流麗（りゅうれい）な線と明るい色彩が、学園祭の高揚感と楽しさを見事に表現しています。

"SHOOT THE MOON."というコピーの反復が、躍動感を伝えています。

また、ポスターカラーによる丁寧な描写やわずかなブレ、背景の筆跡、塗りムラなどが、作品に独自の手作り感を与え、真摯なアプローチが映し出されていると感じました。

■佳作　西武学園文理高等学校

学園祭とは少し遠いイメージで学園祭ポスターの幅を広げました。

期待感と高揚感が、横顔の少女の上部から噴出し、雲や花火のようなイメージに展開しています。

表現力は今回のコンクールでも際立っており、もっと学園祭らしい要素があれば、最上位を競ったかもしれません。たとえば、同じ構図で入道雲バージョンを見てみたいなと思いました。

■佳作　埼玉県立越生高等学校

一般的なモチーフである真正面から少女の顔を捉えた構図が、本作では半分が画面外に飛び出す形で配置され、強烈な印象を与えています。

美しさを強調するのではなく、表情は自身に満ち、頬に絵の具が飛び散って学園祭への真摯な取り組みを示す独自のアプローチが見られます。

あるいは、汚染を可視化したものとも考えられますが、秀逸なコピーである「マスク外しても羽目は外すな」に完璧にマッチしています。

全体的に落ち着いた色調や瞳に梅マークを取り入れるセンスも素晴らしいです。

■佳作　埼玉県立川越女子高等学校

色相がわずかに変化しているものの、緑と赤の反対色で大胆に分割された画面と対角線上に配置された構図が見事に調和しています。海外旅行への憧れやイメージを非常に的確に表現しています。

特に注目すべきは、背景と手前の少女やトランクなどの描き分けにあります。

建造物は簡略化されて装飾的に描かれ、対照的に少女とトランクはリアルな陰影で細部にわたって精緻（せいち）に表現されています。

白と他の色の巧みな塗り分けも興味深い要素と感じました。

■佳作　埼玉県立川越南高等学校

少女の正面アップ。その顔には、同世代の「イマ」が見事に表れています。

鼻の絆創膏やアカンベーの表情には、控えめな主張が込められており、その点も魅力的です。深い瞳の表現には、不思議な魅力が宿っており、引き込まれました。

丁寧に描かれたモチーフが学園祭の楽しい雰囲気を豊かに伝えています。

本作は今回の応募作品の中でも最も活気に溢れたポスターのひとつとして学園祭の楽しさを存分に表現していると感じました。